

162-0042 東京都新宿区早稲田町 12-3
Tel 03-3203-4581, Fax 03-3203-4582,
郵便振替口座：00130-1-11325, みずほ銀行早稲田支店普通預金 1150684

JP-162-0042 Tokyo-to Sinzyuku-ku Waseda-mati 12-3
rete: esperanto@jei.or.jp TTT: [http:// www.jei.or.jp](http://www.jei.or.jp)
uea-konto:jeia-b

広報委員会 2017-05-01

シリーズ「エスペラントの今」 第10号

エスペラントの現状を様々な面からご紹介するシリーズの第10回目をお届けいたします。
ご質問、取材問い合わせ等は、当協会広報委員会までお願いします。

■脱英語依存とエスペラント—『節英のすすめ』

「グローバル人材育成」の名のもとに、小学校での英語の必修教科化が来年度より始まりますが、大学でも、第二外国語を必修からはずすことは既に何年も前から行われていて、外国語教育の英語への一極集中化が加速度的に強まっていると言えます。しかし一方で、少子化日本には海外からの人口流入が増え続け、様々な言語と文化を持った人々が、私たちの隣人として暮らすようになってきている現実があります。また世界では、排外主義を唱える政治家たちが支持を広げ、多文化共生という平和的理念が大きく揺さぶりをかけられています。このような時代に、グローバル化に対応する外国語教育が、極端な英語一極集中の道を歩むことは果たして望ましいことなのでしょうか。「日本学術会議の言語・文学委員会、文化の邂逅と言語分科会が出した提言」(2016-11)[*1]にも「『国際共通語』としての英語を教えるという従来の英語教育に対して、そもそも『なぜ英語が必要か』についてさえ、確実な根拠が社会で広く共有されているとは言えない」という一文があります。

英語一極集中に相對するのが、多様性を重んじる多言語主義であり、エスペラントは、その成り立ちから各国、民族がその言語、文化を大切にすることを支持し、その橋渡しの言語として機能することを目指してきています。実際にエスペラントを通じて、さまざまな国の異なる文化背景を持った人々と交流経験のある若者たちは、世界の多様性を肌で感じ、異なる民族、文化への親しみと愛着を感じるようになり、他者への寛容さを身につけるようになり、まさに「民際外交」の担い手となっています。

上智大学外国語学部ドイツ語学科教授でエスペラントも教える木村護郎クリストフ氏は、「英語ができなければこれからの『グローバル社会』でやっていけない、といった強迫観念から自由になろう!」と主張し、『節英のすすめ』(萬書房)という著書を昨年出版しました。木村氏は「2001.9.11」が「何者の視点で世界を見るのか」と言う問題を突きつけたと述べ、背後にある言語・文化・思想・政治の一極集中の危険性を指摘しています。「英語による情報収集が不足していたからテロを防げなかったのではなく、過度に依存していたことが問題だったと言う事は9.11の重要な教訓です。」

また、福島第一原発の事故で叫ばれ始めた「節電」というキーワードを取り上げ、3.11以前の原子力教育と英語教育がともに「安全神話」、一つの「便利な手段」に過度の信頼を置いてその限界を看過する点が共通していると指摘し、「節電」にならい「節英五か条」を提唱しています。その一つに、他の言語を尊重する姿勢をあげ、自らがエスペラントを使った体験をもとに、特定の文化や慣用が「世界標準」であると言う考え方を取らない、開かれた姿勢を一番取りやすい言語がエスペラントであり、エスペラントを学ぶことは、国際的にコミュニケーションをとりたい人にお勧め、と述べています。

グローバル化時代における脱英語依存の必要性については、6月10日(土)に日本エスペラント協会で行われる木村氏の講演でさらに詳しく聞くことができます。(別紙チラシ参照)

以上

[*1] www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t236.pdf